

# 沖縄に折り畳まれた複数の空間性

## いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか

——櫻澤誠『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』

(中公新書 2015年) をめぐって——

主催：立命館大学国際言語文化研究所「主権と空間」研究会

日本学術振興会科学研究費助成事業 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (課題番号：25370754)

「グローバリゼーションと植民地主義の観点からの主権と空間の歴史的分析」

後援：沖縄大学地域研究所

### ◎プログラム

- ・主旨説明：高橋 秀寿 (立命館大学、司会兼任)
- ・報告：謝花 直美 (沖縄タイムス編集委員)
  - ：松田 ヒロ子 (神戸学院大学)
  - ：大野 光明 (大阪大学)
- ・応答：櫻澤 誠 (立命館大学)
- ・全体討議

◎日時 2016年2月27日(土) 16:00～

◎場所 沖縄大学 3号館101教室

## \* 主旨

立命館大学国際言語文化研究所のプロジェクト「主権と空間」研究会は、現代社会が直面する問題を理解する鍵概念として、グローバル・ナショナル・リージョナルな空間の関係の変容を取り上げ、その分析に取り組んできました。今年度は日韓の領土問題、日本とドイツの極右における空間問題、スコットランド独立問題における EU ならびに国民国家と地域の関係、そしてイスラーム問題の空間性などについて検討しています。沖縄は、グローバル・ナショナル・リージョナルな空間の錯綜とその矛盾が日本において最も先鋭化された形で表れている地域であることはいままでもないでしょう。沖縄のローカルな空間には、ナショナルな眼差し、そしてグローバルな軍事主義の力が差し向けられ、沖縄がその空間に翻弄されながら、その空間に対して自らの地域性を保持・主張しているからです。このように、沖縄には複数の空間性が折り畳まれているといえましょう。

近年、沖縄現代史に関する著作が続々と出版されていますが、どの作品も丁寧に歴史を実証し叙述しているだけでなく、辺野古での新基地建設問題など現在進行形の政治との緊張関係を内包したものとなっています。「主権と空間」研究会の問題関心に沿って言うならば、沖縄現代史を書くということは、ローカルにしてナショナル、グローバルな磁場を裏書きしながらなされているといえるでしょう。

沖縄をめぐる政治状況が日々、悪化するなかで、いま、なぜ、そして、どのように沖縄現代史は書かれているのでしょうか。沖縄現代史を書くという行為は、どのような今日的意味を持ちうるのでしょうか。このシンポジウムでは、「主権と空間」研究会のメンバーである櫻澤誠氏の近著『沖縄現代史』（中公新書、2015年）を一つの対象として、これらの問いをめぐって討議の場を開き、沖縄現代史の空間的広がりや複層性をあらためて考察してみたいと思います。